

中央大学 特別対談

スマート農業を学び 世界へ飛び出せ

中央大学が2027年4月に開設を予定しているのが「情報農学部(仮称)」(設置構想中)です。食料安全保障上、スマート農業化は喫緊の課題。農業生産法人サラダボウルの田中進代表と開設準備室の斎藤正武室長が対談を行いました。

斎藤 法学部が2023年4月から東京都文京区の茗荷谷キャンパスに移転したことで、多摩キャンパスの活性化が課題となりました。そこで浮上したのが情報農学部(仮称)の設置です。

多摩八王子地区は東京都で農産物生産が最も多いエリアの1つです。一方で新しい農業が求められるなど社会的要請もありました。

ロボットなどの先端テクノロジーを活用した「スマート農業」がよく聞かれるようになりましたが、実は日本ではまだあまり進んでいません。

そうであれば、中央大学はスマート農業を志向した新しい農学部を立ち上げようと考え、情報農学部(仮称)を設置することにしました。

教員は約30人、学生は1学年300人程度の規模を想定しています。1学部1学科で、「アグリテック」「フードサイエンス・マネジメント」「環境システム」の3コース制を採用します。1~2年次は農業の基礎や現場を知り、3年次からは3コースに分かれて専門的に学びます。

田中 社会的要請というお話でしたが、ここ数年大きく変わってきました。海外へ行っても「ファーマー」という言葉はあまり使われず、「アグロノミスト」(農業経営者)などの言葉をよく聞くようになりました。農業と関わりのなかった中央大学が新たに農業分野にチャレンジするのは、自然な流れであり、うれしくもあります。

3コース制、法的素養も学ぶ

斎藤 情報農学部(仮称)に導入する3コ

ース制教育について、少し詳しくご説明します。「アグリテック」コースではドローンやロボティクス、グリーンハウス、農業AI(人工知能)など最先端テクノロジーによる農業のスマート化、高収益化を学びます。

「フードサイエンス・マネジメント」コースでは食の栄養・機能、ガストロノミー(食事と文化)などのフードサイエンス、トレーサビリティといった食品流通のシステムやマネジメントを扱います。

そして、環境に配慮しないスマート農業はあり得ません。農業DXにより農業と環境の最適化、農業と地域のあり方を「環境システム」コースで学びます。

特徴的なのは法的素養の学びにも力を入れることです。海外へ流出する農産物の知的財産をどう守るべきか。法的素養、国際感覚などと合わせた文理融合教育を実施する予定です。

2年次には、全国の農場等で行うPBL型(課題解決型学習)の半期科目「アグ

リ・チャレンジ・プログラム」を実施予定です。現場の課題、農業の大変さ、楽しさを吸収してもらい、それを3年次以降の学びに活かしてもらいたいと思います。

田中 学生の皆さんにはぜひ現場をつぶさに観察してもらいたいと思います。今、農業現場は細分化されています。昔ながらの肉体的にきつい現場もあれば、8時入社、5時退社が基本で週休2日制、月の残業が10数時間というところもあります。

サラダボウルでは、正社員は5年程度の経験を経るとデータドリブンなどの仕事も担うようになり、生産現場をモニタリングして高度な戦略立案が求

情報農学部(仮称)
開設準備室 室長

斎藤 正武

1968年生まれ。91年青山学院大学理工学部経営工学科卒業、98年3月同大学理工学研究科経営工学専攻博士後期を単位取得退学。博士(工学)。2018年4月より中央大学商学部教授。23年4月から中央大学AI・データサイエンスセンター 副所長



農業はやりたいことに早くチャレンジできる

欧州連合(EU)の「Farm to Fork(農場から食卓まで)戦略」でも分かるように、「農業従事者はフードバリューチェーンの一翼を担い、産業的に重要な立場にある」と田中進代表は指摘する。サラダボウルは正社員約110人、全体で800人規模。ミニトマト、リーフレタス、イチゴの施設園芸を手掛け、全国13カ所に大規模農場を展開する。高収量を実現し、グループ売り上げは2024年3月期が34億円弱、25年3月期が約60億円。「農業はやりたいことに早くチャレンジでき、普通の職業選択のひとつになっている」(田中代表)

められるようになります。早い者で20代後半から30代前半で農場長になり、年収も1000万円に届きます。「他産業と何ら変わらなくなってきている」ということをお伝えしたいと思います。

「アグリ・チャレンジ・プログラム」でそうした現場も見ただけだと、農業に対する夢が広がると思います。

「チャンスの苗」が植わっている

斎藤 すばらしいですね。サラダボウルの成功の秘訣はどこにあるのでしょうか。

田中 まったく特別なことではなく、どの産業にも共通するマネジメントをきちんと行っていることでしょうか。



サラダボウルのトマト農場ではデジタル機器を使い栽培管理している

サラダボウルには「強い農業現場を構築するための10のキー・ファクター」というのがあり、なかでも大切にしているのが「マーケットクリエーション」です。今は消費者すら何が欲しいかわからない時代です。そのためバイヤーと一緒に試行錯誤しながら消費者に近づき、一緒にマーケットをつくっていくという取り組みをしています。

斎藤 サラダボウルが求める人材像とはどのようなものですか。

田中 米大リーグ、アナハイム・エンゼルス(当時)の幹部に大リーグの魅力を探ねたとき、「サラダボウルみたいなもの」と言われました。容器の中に赤・緑・黄色など色とりどりの野菜があり、甘いのも苦いのも酸っぱいものもある。自分と違う個性を羨むのではなく、それぞれの個性を存分に発揮し、器の中



山梨県北杜市にあるサラダボウルの農場

で調和するから魅力となる——と。それを聞いて、サラダボウルという社名にしました。

個性を大切にすること以外に、「心根の良さ・素直さ」、「チームワーク」、「思考持続力・論理思考」なども私たちが求める人材像として大切にしているものです。

斎藤 なるほど。これからの新しい農業には、今まではあまり求められてこなかった「思考持続力・論理思考」が大切だと感じました。そうした力を身に付けた学生を養成したいと思います。

農業に国境はありません。この分野で学べば世界で活躍できるし、やりがいや成長のチャンスもあります。「チャンスの苗」が目の前に植わっているのです。読者である中高生の皆さんには、ぜひ世界につながる「チャンスの苗」を取りに来て欲しいと思います。

株式会社サラダボウル
代表

田中 進さん

1972年山梨県生まれ。横浜国立大学国際経営学部卒。三菱UFJ銀行に5年、プルデンシャル生命保険に5年勤務。2004年に株式会社サラダボウルを設立。以降、兵庫県加西市、山梨県北杜市、ベトナムと生産拠点を拡大

行動する知性。

中央大学